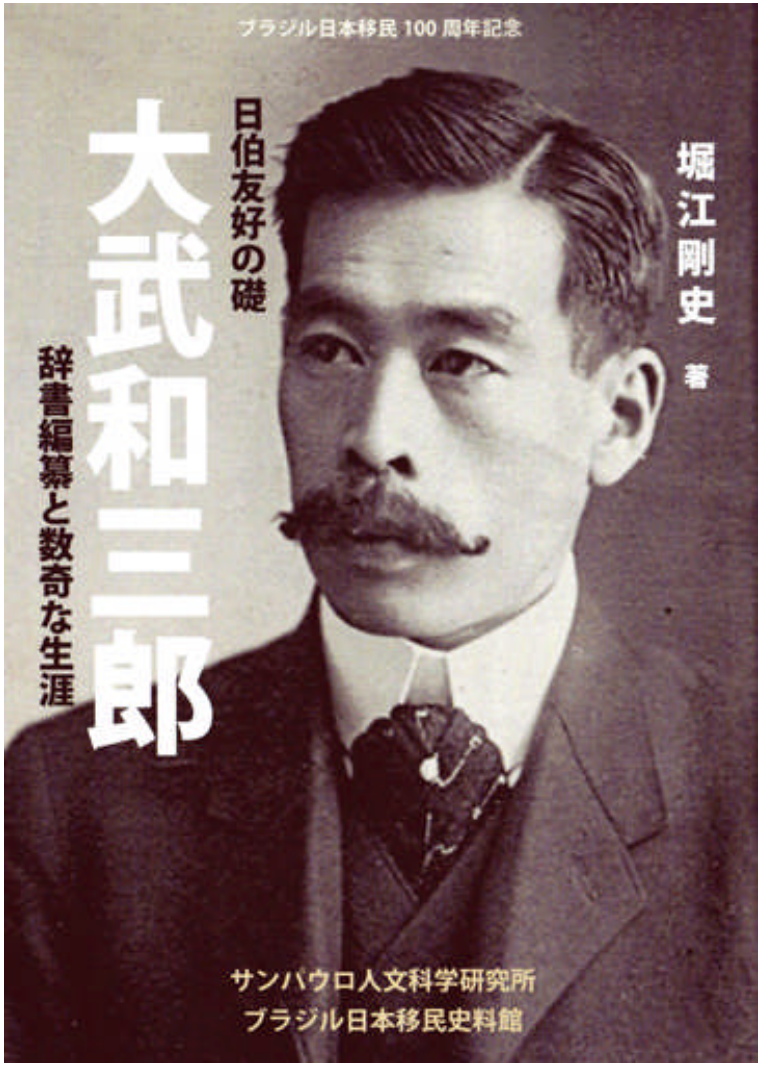

ブラジル日本移民100周年記念
日伯友好の礎
大武和三郎
辞書編纂と数奇な生涯
堀江剛史 著
サンパウロ人文科学研究所
ブラジル日本移民史料館

裏表紙

日伯友好の礎

大武和三郎

―辞書編纂と数奇な生涯―

目次

刊行のことば　本山　省三

日伯友好の礎　大武和三郎
―辞書編纂と数奇な生涯　……堀江　剛史

①　移民の道標「葡和辞典」―約七万語を独力で翻訳
②　大武特別展が史料館で―人文研が顕彰のきっかけ
③　ア・バローゾ号が訪日―明治の日本伝える航海記
④　伯王室・皇室の邂逅―明治天皇「条約結びたい」
⑤　大武十七歳、いざブラジルへ！航海中に帝政が崩壊
⑥　帝政崩壊、レ殿下は退艦―横浜から一年、リオ到着
⑦　伯側に在留記録なし？―海軍兵学校でポ語を習得
⑧　海軍の反乱に参加？―都落ち、コーヒー農場に
⑨　日清戦争知り、急遽帰国―日伯修好条約締結へ
⑲　初のポ語辞典は九州なまり？―青柳郁太郎との交誼
⑪　私財投じた畢生の大事業―大武知る伯人がリオに
⑫　うわ言もポルトガル語―「伯国に忠誠を尽くす」

大武和三郎・略歴と展示コーナー設置の経緯
……森田　左京

青柳郁太郎（あおやぎ・いくたろう、一八六七～一九四四）

刊行のことば

大武和三郎は、はじめてブラジルの土を踏んだ「笠戸丸」移民に先立つ十八年前、一八九〇年にブラジルに渡り、その後波瀾・数奇な運命を辿った先人であるが、なかでもかれが畢生の努力を傾けて編纂した「葡和」「和葡」の両辞典については、戦前・戦後の移民が、測り知れない学恩を受けてきたことでも知られている。

近年、その隠れた功績の表彰については、関係者の長年に及ぶ地道な努力により、昨年は移民史料館によって、笠戸丸以前の大武和三郎を含む三人の来伯者の特別展が開催され、本年は、特にかれの事跡を顕彰する常設のコーナーが同館内に新設された。こうした機運に応じ、関係者の研究成果を受け継いで成った一文が、本年三月、ニッケイ新聞紙上に連載された同紙堀江剛史記者による記事である。

本年は周知の通りブラジル日本移民百周年の記念すべき年に当る。

当研究所は移民史料館と共に、文字通り日本とブラジルの架け橋として生きた大武和三郎の業績を称えるため、同記者の「大武和三郎ー辞書編纂と数奇な生涯ー」の全文を中心に、さらに一層の貴重な写真や年表を収録して編纂した小冊子を刊行することとした。

当地日系人は無論のこと、百周年を記念して予想される母国からの多数の参列者や、日本の各大学・研究機関・博

物館などに、移民を愛した先覚者「大武和三郎」を記憶していただければ幸いである。

サンパウロ人文科学研究所
理事長　本山　省三
二〇〇八年四月

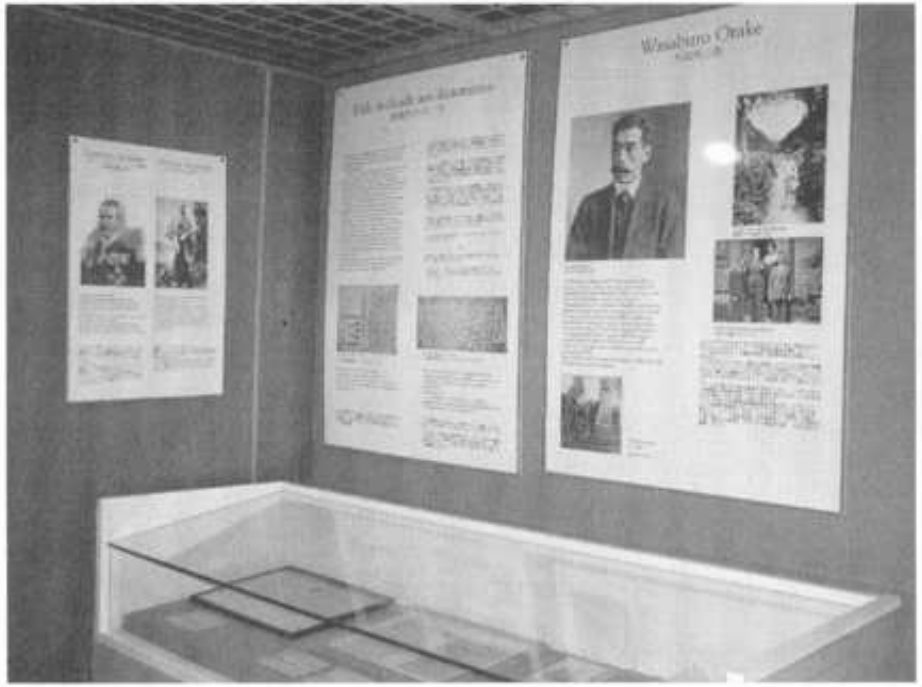
展示コーナー

十九世紀末のブラジルに約四年間滞在、帰国後にブラジル公使館（一九二四年に大使館に昇格）の通訳官として勤務、移民関係の公文書作成に携わり、葡和・和葡辞典を編纂した大武和三郎（一八七二～一九四四）を紹介するコーナーがブラジル日本移民史料館（七階）に完成、公開されている。

コーナーでは、大武が一八八九年に横浜で乗艦した軍艦「アルミランテ・バローゾロ号」のクストジオ・デ・メーロ艦長や辞書編纂を紹介する写真パネルのほか、ブラジル海軍省発行の磯関士免状、一九一八年に発行された葡和辞典の初版本、ブラジルの友人と交わした手紙など十数点を展示、その波乱万丈な人生と辞書編纂の苦労を垣間見ることができる。

大武を長年検証してきたサンパウロ人文科学研究所の森

田左京氏は、「死後六十年以上が経って日系社会がようやく顕彰することとなった。日伯友好の礎となった大武氏を多くの人に知ってもらえれば」と期待を込めて語った。



ブラジル日本移民史料館
「大武和三郎」常設コーナー完成
葡和辞典編纂を顕彰

O PRIMEIRO DICCIONARIO DE PORTUGUEZ-JAPONEZ

Uma obra notavel, de 1.200 paginas, realizada em mais de dez annos pelo sr. Otake — Um prefacio do embaixador Leão Velloso

ブラジルの新聞でも「初の葡和辞典」と報じられた。1938年（昭和13年）、リオ・デ・ジャネイロで発行されたDiario da Noite紙の記事。

一度の廣告する注文殺
惹ち數百部を賣り殘本僅少
となりました。また品切れ
にならざる内御申込を勧ひ
ます。

機會逸すべからず

和葡辭典

葡和辭典

無なるべからざる必要書

一手販賣所 伯剌西爾時報社 Caixa Postal, 34 São Paulo

特約販賣所 瀬木商店 Caixa Postal, 171 São Paulo

辞書の広告は好評な売れ行きを知らせている。戦前の邦字紙、伯剌西爾時報で販売されていた。

（左から）長男信一、大武和三郎、次女美知子、次男修二、妻清（セイ）、長女花子。1935年（昭和10年）ごろ、東京・世田谷にあった西洋の雰囲気漂う大武家で撮影されたもの。

大武の長男信一氏。戦後移民が始る前の50年に「葡和新辞典」を再版した。

「畢生の大事業」と辞書編纂を称える新聞記事。1936年(昭和11年)11月12日付け、東京日日新聞。

青柳郁太郎が発起人となり、大武に感謝状と記念品を送ったさいの新聞広告。これを知った大武は殊のほか喜んだという。

ブラジルへ渡航前の大武（左）。横浜の志善塾で英語を学んでいた17歳のころ。

金時計、灰皿、煙草箱、携帯用煙草入れの4点が記念品として大武に贈られた。

日本経済新聞のコラム（交遊抄）

朝日新聞が大武和三郎を記事で紹介

"日伯友好の礎"

大武和三郎

―辞書編纂と数奇な生涯―

堀江剛史

〝日伯友好の礎〟

大武和三郎

―辞書編纂と数奇な生涯―

堀江剛史

今年二〇〇八年は、日本人のブラジル移住が始まってから、ちょうど百年。日伯両政府は「日伯交流年」と位置付け、両国で七百もの記念行事が予定されている。最初の移民船「笠戸丸」が到着した一九〇八年より遥か以前、十九世紀末に唯一人、ブラジルに渡った人物がいた。約四年の滞在後に帰国、三十余年をかけてポルトガル語辞書を編纂した大武和三郎（おおたけわさぶろう、一八七二～一九四四）である。在日本ブラジル公使館（二四年に大使館に昇格）の通訳官として、明治、大正、昭和の長きにわたり、日伯友好に尽力したその人生は、数奇な運命に彩られたものでもあった―。本稿は、約十年間、大武和三郎検証を重ねてきたサンパウロ人文科学研究所の森田左京氏の提供資料をもとに構成した。

１、移民の道標「葡和辞典」

―約七万語を独力で翻訳―

「感無量」―。大武の孫にあたる和夫氏（５５）は昨年六月十一日に開かれたブラジル日本移民史料館の特別企画展「笠戸丸以前の渡航者たち」のオープニングレセプションに参加するため、初めてブラジルを訪れた。

大武の編纂した『葡和新辞典』を手に、「学問をしたわけではない祖父の作った辞書がここまで大切にされているとは」と感慨深く語った。

この特別展は、一九〇六年に日伯貿易の先駆けとして、サンパウロ市に開店した藤崎商会（宮城県仙台市）、同年に永住を目的として、妻子六人、同志七人とリオ・デ・ジャネイロ州に入植した隈部三郎とともに辞書編纂を成し遂げた大武を顕彰するものだった。

一九三六年（昭和十一年）に九歳で海を渡った上原幸啓氏（８０）は、現在サンパウロ大学の名誉教授。「移民船に必ずあったものは二つ。御真影と大武さんの辞書でした」。　言葉に苦労した移住当時、辞書を携えて小学校に通い、勉強場所だった居間の机には、常に辞書がおいてあったという。

大武が『葡和辞典』を出版したのは、一九一八年（大正七年）。その後も精力的に編纂を続け、二五年（大正十四年）には、『和葡辞典』を発行。

さらに三七年（昭和一二年）には、年々増加するブラジルへの移民の数に対応するかのように、数万語を追加し、見出し語だけで六万八千語に及ぶ『葡和新辞典』を完成させる。

当時の新聞（東京日日新聞、十一月二十日付け）には、「老躯に鞭うつ九年ー畢生の大事業成る」とあるように、六十四歳だった大武一世一代の大仕事が世間にも知られることになる。

出版翌年の三八年には、ブラジルメディア（Ｄｉａｒｉｏ ｄｅ Ｎｏｔｉｃｉａｓ／Ｏ ｇｌｏｂｏ／Ａ Ｎａｃａｏ／Ｏ ｊｏｒｎａｌ＝全て五月発行）が、両国の掛け橋となる辞書誕生を伝える。

辞書以外にも、『ブラジル渡航者必携ー葡語文法解説』（二五年）『ブラジル渡航者必携ー日伯会話』（二七年）を発行するなど、情熱の傾注ぶりは尋常ならざるものがある。

戦前にブラジルに渡った日本移民十九万のほとんどが三年から五年の出稼ぎの予定だったこと、アルファベット表記を解する人の割合などを考慮すれば、辞書利用者の数はそれほどでもなかったという見方もある。

しかし、大武の辞書がなければ、日本におけるポルトガル語研究の発展、進歩の遅れは著しかった

自宅でくつろぐ晩年の大武和三郎。日伯友好に尽くした人生だった。

ろうし、日本移民が感じた言葉の壁は、さらに厚いものになっていたのではないか。

戦後の五五年に星誠著の「最新葡和辞典」（見出し語数一万八千）が発行されるまで、大武の編纂した辞書は、移民たちがポルトガル語を調べる唯一のよすがでもあった。

2、大武特別展が史料館で

―人文研が顕彰のきっかけ―

全くの個人でポルトガル語辞書の編纂を成し遂げた大武和三郎の功績に対し、初めてブラジル日系社会が報いたといえるブラジル日本移民史料館特別企画展の実施、そして孫の和夫氏が来伯するまでの経緯を最初に記しておきたい。

二〇〇四年、サンパウロ人文科学研究所（人文研）の脇坂勝則顧問（８４）が、「大武氏を顕彰するため、移民史料館に展示コーナーを設けたい」と人文研監査役の森田左京氏（７８）に話したことから始まった。

脇坂顧問は、移民五十年祭にも同様に提案、邦字新聞にも寄稿したというが、コロニアからの反応は「全くなかった」。

それから半世紀が経ってもその思いは止まず、遺族とも連絡を取り、資料収集も行いたいとの考えからの相談だっ

た。

電力関係のコンサルタントを長く務めた森田氏は、サンパウロ州技術公社（ＩＰＴ）に勤務していた次弟時生氏（八六年に五三歳で死去）、末弟大氏（七一、元琉球大学教授）が手掛けた『ブラジル・ポルトガル語技術用語辞典』（七五年出版）の監修者。

簡易なポルトガル電子辞書の必要性を早くから邦字新聞などで訴える一方、その貢献に比べ、認知度の低い大武について、十年にわたり個人的に検証を行なっていた。

脇坂顧問の依頼を受け、早速インターネットで五〇年に『葡和新辞典』を再刊した大武の長男信一の名前を検索。すると、四一年に東京大学工学部機械工学科を卒業していたことが分かった。

五三年卒業の同窓生である森田氏は、早速同科事務室に問い合わせ、遺族の連絡先が判明した。

四歳で移住、日本語学習を大武の辞書に頼ったという脇坂顧問が、「この学恩は忘れることができませんー」としたためた手紙を送ったところ、信一の長男和夫氏から丁重な返事がきたことから、二世代を経た日本とブラジルの交流が始まった。脇坂氏は〇四年に訪日したおり、和夫氏と会っている。

和夫氏は、七六年に東京大学法学部を卒業、ハーバード大で法律を学び、日米両国の弁護士資格を持つ法律家。

〇六年三月に開かれた「日系美術家による人文研カンパ展」を訪れた同じく東大出身の西林万寿夫在サンパウロ日

本国総領事（５５）に、森田氏がもしかと思い、この話題を持ちかけたところ、偶然にも学生時代からの大親友。

西林総領事によれば、かねてから和夫氏は、「君の在任中に祖父のいたブラジルを是非訪れたい」と話していたというから、話はトントン拍子に進んだ。

五二年生まれの和夫氏は、四四年に死去した祖父との直接の思い出はなく、「ブラジルからお客が来たことを、不思議に思っていた」と幼少時を振り返る。

父信一は、大武について多くを語らなかったが、次のように話していたという。

「無口だったが、機嫌がいいときはブラジルのことも多少話していた。頑健で長生きすると言われていたが、七十一歳で亡くなったのは、（辞書の編纂で）骨身を削るような努力をしたからではないか」

ブラジル日本移民史料館であった特別展オープニング（07年6月11日）で、（左から）手に葡和辞典を持つ在聖総領事の西林万寿夫、大武和夫、森田左京の3氏。

3、アルミランテ・バローゾ号が訪日

―明治の日本伝える航海記―

「およそブラジルに来た邦人で、大武さんの字引の世話

にならなかった人はないだろう」。

「物故先駆者列伝ー日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人々ー」(日本移民五十年祭委員会編、一九五八年発行、現在人文研ＨＰ＝ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｃｅｎｂ．ｏｒｇ．ｂｒ／ＣＥＮＢ／ＨＯｍｅ．ｈｔｍｌに掲載中）は、大武の業績を冒頭でそう伝える。

辞書編纂を地道に行った一方、その人生の前半は運命に翻弄された数奇なものだったといっていい。

大武和三郎は、いかなる人生を送ったのか　ー。大武を知る数少ない文献である「物故者列伝」によると、「明治五年（一八七二年）　に医師大武知康の三男として東京神田駿河台に生れた」。

和夫氏は父信一を「非常にドメスティックな人生」と祖父大武と比べて語るが、知康はなかなかの人物だったようだ。

評伝は伝える。「三河の出身で、徳川譜代の神官の家に生まれ、血の気の多い青年で、青年時代の直参の身でありながら、水戸浪士等と暗躍して『悪事度重なる』という理由で、老中から御手判を召し上げられ、変名で世を忍んだこともある快男児ー」

大武の通った学校について、一八七五年（明治八年）創立の忍岡学校（現忍岡小学校、在東京都台東区）を卒業後、一時浜松に移り、「浜松一中に学び、途中から横浜一中に転校」ーとあるが、これには疑問符がつく。

当時横浜にあった中学は、市立横浜商業と三郡共立学校

（現在の秦野高校）、県立学校は尋常師範学校（明治二十年創立）の三校のみ。浜松一中の創立も一八九四年（明治二十七年）となっているからだ。

大武がどの学校に行っていたかは、定かではないが、私塾と思われる「志善塾」に通っていたという。

一八八九年七月二十日、皇帝ドン・ペドロ二世の孫にあたるアウグスト・レオポルド殿下（海軍少尉として乗艦）を乗せたブラジルの軍艦アルミランテ・バローゾ号（クストジオ・デ・メーロ艦長、後の海軍大臣）が横浜に入港する。

マゼラン海峡を通過、バルパライソ（チリ）から太平洋経由でシドニー（豪）に寄港、約八ヵ月の航海を終えていた。二千五十トン、二千二百馬力、時速十二ノット。リオ・デ・ジャネイロ海軍工廠で建造した当時のブラジルが誇る巡洋艦だった。

バローゾ号は、横浜の後に寄港した長崎を八月十四日に出港しているから、約一ヵ月間日本に滞在したことになる。

クストジオは帰国後に著した「二十一ヵ月世界一周航海記」（ＶＩＮＴＥ　Ｅ　ＵＭ　ＭＥＺＥＳ　ＡＯ　ＲＥＤＯＲ　ＤＯ　ＰＬＡＮＥＴＡ一八九六年発行、四百十二頁）で、三十四頁にわたって日本について記述、日本人を次のように評し、手放しで賞賛している。

「頑健で礼儀正しく、狡猾なことなく繊細で、知識を得ることを無上の喜びとする好奇心旺盛な人々である。かつ、

勤勉で生産性も高く、街は清潔で乞食や酔っ払いは少ない。訪れたアジアやオセアニアの国のなかでも彼らほど優しく、もてなしの精神を持ち、感じがよい人々はいない」

第一回目の日本人移民船笠戸丸がサントス港に着いた時の様子をコレイオ・パウリスターノの記者が、「ブラジルの国旗を持参した心づかいと、その整った洋装と寝台の清潔さ」と驚きを以って記事にしている。

笠戸丸移民の品行については、全く逆の指摘もあるが、それはさておき、実際に日本を訪れたクストジオもまた同じような印象を抱いたのは、興味深い。

アルミランテ・バローゾ号の艦長だったクストジオ・デ・メーロ。後に海軍大臣となり、辞職。海軍の反乱を起こす。「21カ月世界一周航海記」を著す。

クストジオ・デ・メーロが著した「21カ月世界一周航海記」(1896年出版)。森田左京氏がサンパウロ市立図書館で発見。複製本を作成した。

幕末最初の開港場で外国人との接触が多かったからか、記述のなかには、「横浜の人々は英語に堪能である」とある。クストジオ一行を迎えた通訳のなかに、志善塾でしっかりした英語を身につけていたのだろう、若き日の大武もいた。

航海記によれば、横浜の町並みなどにも触れているから、大武も通訳の一人として一般市民の生活などを一行に

説明しながら、歩いたのではないか。
これが縁で、レオポルド殿下に大いに気に入られた大武は、ブラジルに招かれることになる。
この十九世紀末に発行された航海記は、「ポルトガル航海者協会」のサイト上でその存在を知った人文研の森田氏が古本屋を探索したが、成果がなかった。
海軍関係者からの情報から、「マリオ・デ・アンドラーデ・サンパウロ市立図書館」でようやく発見。
しかし、損傷が激しかったため、マイクロフィルムに保存、ＣＤに移した後、手作業で製本化したもの。
寄贈のため、後日同図書館に立寄ったところ、対応した専門担当官が偶然にも軍艦の命名の元となったパラグアイ戦争の英雄アルミランテ・バローゾ（一八〇四～一八八二）の子孫だったことから、大変感謝されたという。

4、伯王室、皇室の邂逅

ー明治天皇「条約結びたい」ー

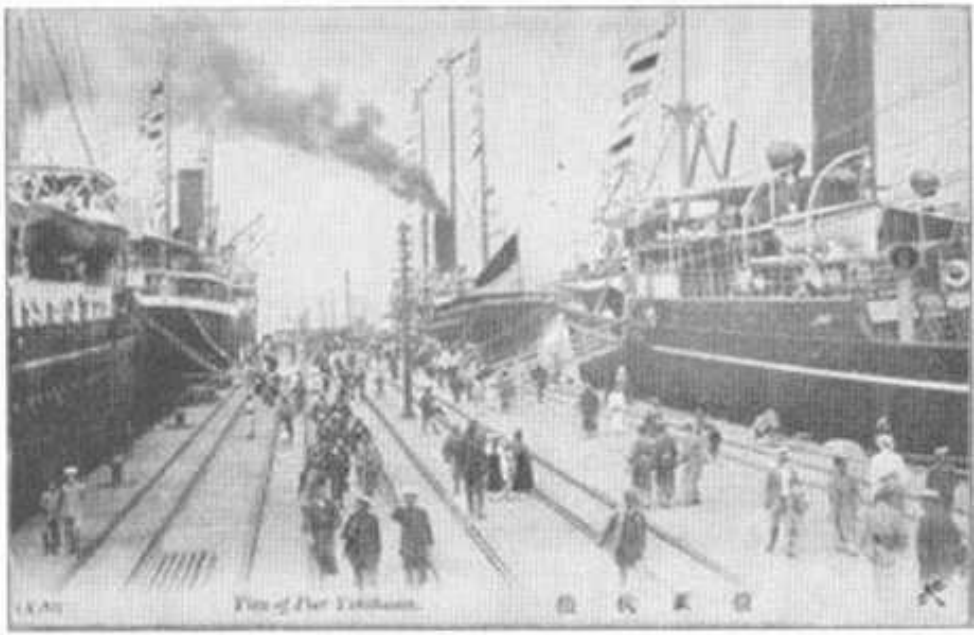
一八六七年の明治維新から、二十二年。汽笛の響く港町横浜で思春期を過ごし、この時代に通訳が出来るほどの英語を身につけた大武が、幕末の気風を身につけ、海外への憧憬を抱いていても不思議ではない。
加えて、「薩長の私物だとして明治政府を白眼視」（列伝）していたからか、知康はブラジル行きを許した。
かくして大武は、到着からわずか二週間後に横浜を出港するアルミランテ・バローゾ艦上の人となる。

列伝によれば、他にも二、三人がブラジルへ招かれたようだが、「父兄の反対にあって」断念したという。

三男であるとはいえ、この進歩的過ぎるといえる父知康の判断がポルトガル語辞書を早生させることになるのである。

いつ戻れるや知らず、遠く離れる祖国日本を見つめながら、大武は何を考えていたのだろうか。

さて、クストジオの著した「二十一ヵ月世界一周航海



1900年（明治33年）頃の横浜港の様子。17歳の大武がアルミランテ・バローゾ号に乗り込んだのもこの桟橋か。絵葉書として売られていたもの。（横浜開港資料館所蔵）

記」は、公使館が開設した一八九七年から二年間、副領事として東京に赴任したオリヴェイラ・リマが著した「日本印象記－風土と人々（Ｎ０　ＪＡＰＡＯ　ｉｍｐｒｅｓｓｏｅｓ　ｄａ　ｔｅｒｒａ　ｅ　ｄａ　ｇｅｎｔ，一二九〇三年発行）」同様、ブラジル人が見た当時の明治時代を知る文献といっていい。

特記すべきは、横浜滞在中、クストジオやレオポルド殿下が、明治天皇に謁見した場面の記述だろう。

後述するが、この訪問から四ヵ月後、ブラジルの帝政は崩壊する。つまり、ブラジル王室と日本の皇室の最初で最後の接触となったわけである。

当時日本はブラジルとの外交関係がなかったため、クストジオは、ポルトガルの外交官を通し、明治天皇（「ミカド」とクストジオは書いている）への謁見を申請している。

許可が出たことを伝えられたクストジオは、レオポルド殿下を含めた八人の士官と共に、正装を持参し、蒸気機関車で東京に向かう。

「新しく壮麗な皇居」に到着後、五分ほど待ったところで宮内大臣だった土方久元に案内される。軍装に身を固めたミカドに、土方がコートを持ってきたことも伝える。会話は常に土方を通し、フランス語で行なわれたようだ。

「ミカドは優しく挨拶された後、航海の様子について聞かれ、『私たちはかねがねブラジルと通商と友好関係を結びたいと願っていました』と話された。そこで、『では何

故、軍艦をブラジルに派遣なさらないのですか』と尋ねたところ、遠方であることをその理由にされたので、『ブラジルが日本人にとって遠いように、我々にも日本は遠かったのですよ』との反駁に、ミカドは笑みをこぼされた」

その後、皇居を土方に案内され、「大袈裟な表現ではなく」と前置きしながら、感嘆の美辞麗句を並べ、土方の紳士的かつ高貴な態度にも「心から敬服しながら」辞去する。

翌日には、西郷従道海軍大臣（西郷隆盛の弟、後の海軍大将、元帥、侯爵）が催した芝離宮での歓迎昼食会で、三条実美内大臣（元太政大臣、公爵）、大隈重信外務大臣（後の総理大臣、侯爵）、榎本武揚文部大臣（子爵）とも会っている。

和服姿のアウグスト・レオポルド殿下。日本滞在時に撮影したものと思われる。

榎本は、オランダで国際法や軍事知識、造船技術など当時の最新技術を学び、幕府が発注した開陽丸に乗って一八六七年一月にリオ・デ・ジャネイロに寄港十一日間遊んでいるから、一行と会話が弾んだことは想像するに難くない。

5、大武十七歳、いざブラジルへ！

―航海中に帝政が崩壊―

ブラジル王室の来日とはいえ、まだ国交がなかったことを考えれば、礼を尽くした遇し方ともいえるが、これには二度にわたるブラジル側からの打診の結果であったともいえる。

一八八〇年には、アルトゥール・シルヴエイラ・ダ・モッタ海軍少将（後のジャセグアイ男爵）が清国・ブラジルの条約締結後、東京で外務省関係者と会談、日伯修好通商条約が話題に上っている。

これをもてなしたのは、太政官政府時代の海軍卿（海軍大臣にあたる）だった榎本武揚であり、クストジオ一行を迎えた四年後の一八九三年に「殖民協会」を創立、九七年に中南米初の官約移民として、メキシコに日本人植民地を建設する。

ちなみに、この時航海したのがヴイタル・デ・オリヴエイラ号。ブラジル海軍初の世界一周航海（一八七九～一八八一）を成し遂げた軍艦でアルミランテ・バローゾ号は二番目となる。

二年後、エドアルド・カラード清国駐在公使が帰国途中に日本に立ち寄り、国交締結に関し交渉を行なっているから、当時の政府関係者がブラジルに関心を持っていても不思議ではない。

「二十一カ月世界一周航海記」では、日本の歴史や学校の制度にも詳しく触れているが、富士山については一頁を割いている。チリのバルパライソから太平洋横断に二ヵ月。豪・シドニーから北上すること一ヵ月半の航海後、左舷に見た富士の美しさは格別だったのだろう。

「その特別な形は日本のほかのどの山とも見間違うことがない」とし、神話にある琵琶湖との関係や夏に多くの巡礼者がいることなど、かなり詳細に記している。

八月四日に横浜を出航後、長崎に向かう船の上で、富士山の最遠望地である紀伊半島沖を越えるまで、日本一の山を誇りに感じながら、興奮気味の大武がクストジオに揚々と話したものでは、との想像も膨らむ。

大武十七歳。上海、香港、シンガポール、バタヴィア（ジャカルタのオランダ植民地時代の旧名、インドネシア）の潮風をその柔軟な精神に浴びていた。乗組員らとの会話でポルトガル語を覚えつつ、未だ知らぬ国ブラジルに期待を膨らませ、船中の生活を楽しんでいたのではあるまいか。

アルミランテ・バローゾ号＝写真＝は、フランスで学んだリオ出身の写真家、マルク・フエレス（一八四三～一九二三）による写真でも有名だ。

一八八八年十月二十七日のリオ出港を記念、乗組員らが開帆の準備をしているもので、フエレスは、「帝国海軍写真家」だった。

余談だが、一八四〇年にフランスの司祭ルイス・コンテによって写真機が初めてリオに持ち込まれた。写真の魅力に夢中になったのは、レオポルド殿下の祖父にあたるドン・ペドロ二世であり、写真機をフランスに注文したブラジル最初の〝写真家〟でもあった。

十一月三十日、途中寄港したアチエ（スマトラ島、当時オランダ領）で乗組員の誰もが想像しなかった知らせを受ける。

十一月十五日にブラジルに共和制が敷かれ、帝政が崩壊していたのである。

アルミランテ・バローゾ号。1889年に横浜と長崎に寄港した。リオ出航時をブラジルの写真家マルク・フェレスが撮影した。

6、帝政崩壊、レ殿下は退艦

―横浜から一年、リオ到着―

一五〇〇年にポルトガル人に「発見」されたブラジルは四九年、サルバドールに総督府が置かれ、アフリカからの黒人奴隷を使役しての砂糖生産が発展する。

一五八〇年から六十年間、ポルトガルはスペインに併合されたうえ、アジアにおける勢力争いでヨーロッパ列強に押される状況にあった。自然、ブラジルに目が向き、開発に力を入れ始め、バンデイランテ（奥地探検隊）を始めとする入植が行なわれていた。

一八〇八年、ナポレオンに迫われたポルトガル王室はイギリス艦隊に守られてブラジルへ渡り、ドン・ペドロ皇太子（後のドン・ペドロ一世）が一八二二年に独立を宣言。以来、帝政が続いていたが、八八年の奴隷解放を経て、八九年、軍事クーデターにより、共和制へと移行する。

当時、皇帝だった祖父のドン・ペドロ二世は帝政崩壊を受け、ヨーロッパに亡命。レオポルド殿下は、故郷遠く離れ、アジアの只中にいた。

航海記によれば、アチエで帝政崩壊の知らせを受けた経緯はこうだ。

当時すでに海底電線があったペナン（当時英領、現在のマレーシア）で発行された英字新聞を読んだオランダ海軍の艦長から、帝政崩壊の記事があったことを聞く。

衝撃を受けながらも、航海を続け、コロンボ（セイロン島、現在のスリランカ）に十二月十四日に到着後、リオに連絡。十七日に本国から受け取った電報には、共和制になったことから、一八二二年から使用のブラジル帝国国旗＝写真＝に描かれている王冠を消去したものを使うこと、ナポリで新しい国旗を受け取るよう指定している。

一八八九年、帝政崩壊と共に廃止されたブラジル帝国国旗。コロンボを出るまでア・パローゾ号のマストにはためいていた。

続いて、海軍少尉だったレオポルド殿下の職を解くことが命じられており、「その内容を読んだ殿下の表情や態度は見るに耐えないものだった」とクストジオは書いている。

祖父のドン・ペドロ二世に連絡したレオポルド殿下は、六ヵ月の休暇扱いにすることを望み、クストジオはこれを本国に電信で連絡。結果、二ヵ月の休暇扱いとなり、退艦する。

クストジオは命令に背く自らの行動を戒めながら、「コロンボの港を離れるまで、王冠のついたブラジル国旗を下ろすことはなかった」と武士の情けともいうべき態度を取っている。

アルミランテ・バローゾ号は、レオポルド殿下をコロンボに残し、同月二十一日にボンベイ（現在のムンバイ、インド）に向けて出港した。

大武をブラジルに招いたレオポルド殿下は時に二十二

歳。後にオーストリアに渡り、一九二二年に五十五歳の若さで亡くなった。曽祖父ドン・ペドロのブラジル独立宣言から、ちょうど百年目であった。

ともあれ、ブラジルに着く前から、後ろ盾を失った大武の不安な心情は、いかばかりであったろうか。

スエズ運河を通過、ヨーロッパ経由でブラジルへと航海を続け、横浜出港から一年が過ぎた九〇年七月二十九日、アルミランテ・バローゾ号は、ついにリオに帰港する。二十一ヵ月と二日、約六万八千キロの旅は終わった。

と同時に、日本移民に先駆けること十八年、ブラジルの大地にその一歩を踏み出した大武の生活が始まったのである。

アルミランテ・バローゾ号の世界一周航路

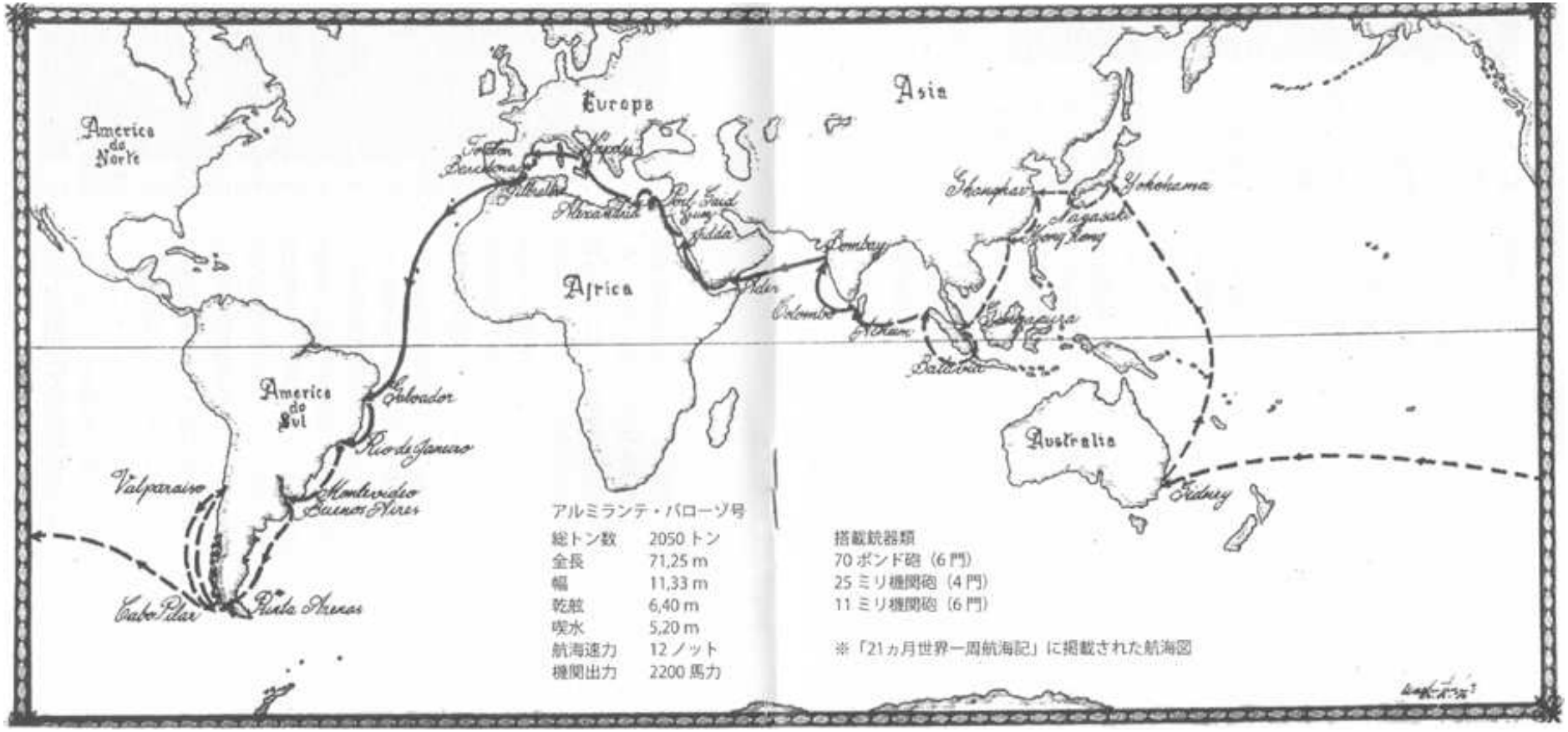
一八八二年に帝国海軍工廠（リオ・デ・ジャネイロ）で建造、進水式を行なう。

設計はジョアン・カンジド・ブラジル。推進方式は、帆走と蒸気機関による。

一八八八年十月二七日、リオ・デ・ジャネイロを出港、ブラジル海軍初の世界一周航海を成し遂げたヴィタル・デ・オリヴェイラ号に続いて、二回目の世界一周航海を行なう。

寄港地は、モンテ・ヴイデオ（ウルグアイ）、ブエノス・

アイレス（アルゼンチン）、プンタ・アレーナス（チリ）、ヴァルパライゾ（同）、シドニー（オーストラリア）、横浜（日本）、長崎（同）、上海（中国）、香港（英領、現中国）、シンガポール（英領、現シンガポール）、バタヴィア（オランダ領、現インドネシア・ジャカルタ）、アチェ（オランダ領、現インドネシア）、コロンボ（英領、現スリ



ランカ)、ボンベイ、(同、現インド・ムンバイ)、アデン(同、現イエメン)、ジッダ(サウジアラビア)、スエズ(エジプト)、ポート・サイド(同)、アレサンドリア(同)、ナポリ(イタリア)、トゥーロン(フランス)、バルセロナ(スペイン)、ジブラルタル(イギリス)、サルヴァドール(ブラジル)の二四都市。二一ヵ月と二日、約六万八千キロの航海だった。

一八九三年、二度目の世界一周航海に出るが、同年五月、スエズ運河から一二〇マイル地点の紅海で座礁する。

7、伯側に在留記録なし？

ー海軍兵学校でポ語を習得ー

大武について書いたものー特にブラジルで過ごした四年間はー少ない。前出の「先駆者列伝」や「ブラジル全史」（佐藤常蔵著、一九八五年）、「埋もれ行く拓人の足跡」（鈴木貞次郎〔南樹〕著、一九四一年）などがあるが、資料が少ないためか想像によったところも多く、明らかな間違いも散見される。

後に辞書を編纂するほどの人物であるから、日記などを書き残していたかとも思われる。

だが、孫の和夫氏によれば、大武の荷物を含め、疎開先にもっていた重要なものは、全て空襲で焼失したと見られ、大武のブラジルでの生活の様子を知る術は、ほぼない状態といっていい。

「埋もれ行くー」を書いた鈴木は、民間人として初めてチリ行きの旅券を受け、一九〇五年東洋汽船会社の「グレンファーグ号」に乗り込んでいる。当時、南米や移住事業を知る人が少なかったこともあり、二人は知己を得ていた。

「大武の直話なるも」と文中にあるように、直接大武本人からブラジルでの体験を聞き、書き残した貴重なものといえよう。それによればこうだ。

ーリオ到着後、「メンデス商会」という会社に入った。非常に可愛がられたが、クストジオの勧めもあり、海軍兵学

校（Ｅｓｃｏｌａ　Ｎａｖａｌ、かつてはＡｃａｄｅｍｉａ　ｄａ　Ｍａｒｉｎｈａ）に入学したーとある。他の文献も同様だ。

リオでの大武の足取りを調べるため、〇七年末に訪れた海軍資料館＝写真＝（リオ市、ｓｅｒｖｉｃｏ　ｄｅ　Ｄｏｃｕｍｅｎｔａｃａｏ　ｄｅ　Ｍａｒｉｎｈａ）のモニカ・ハルツ歴史資料担当室長は、「大武が正規の生徒だったとは考えにくい」と話す。

現在でも兵学校に入学するのは、ブラジル国籍者、もしくは帰化者でなければならないから、というのがその理由だ。

それを裏付けるかのように、当時の資料に「Ｗａｓａｂｕｒｏ　Ｏｔａｋｅ」の名前は存在しない。国立公文書館（Ａｒｑｕｉｖｏ　Ｎａｃｉｏｎａｌ）の担当官サチロ・ヌネス氏も「海軍資料室にないなら、確認は難しい」と話し、以前同様の問い合わせがあり、外務省資料もあたった結果、大武の出入国記録は見当たらないという。

リオ市にある海軍資料館。大武の存在を証明する資料はない。

アルミランテ・バローゾ号の乗組員リスト（士官以上）

にはもちろんなく、航海記でも大武の乗艦については触れられていない。

つまり、大武について書かれているものは、自身が誰かに語ったものが記録になっており、ブラジル側では大武のブラジル滞在を証明するものが存在しないということになる。

十九世紀後半のブラジルとはいえ、一外国人が身分証明書もなく、四年もの間滞在できたものだろうか。

ましてや日本人などいない時代の話である。

〇七年六月にあったブラジル日本移民史料館の特別展示のため、和夫氏が送った大武家保存の資料のなかに、大武がリオにいたことを証明する正式文書が発見された。

海軍省が発行、海軍大臣になっていたクストジオの署名がある四級機関士（一八九三年四月二十四日発行）の免状＝写真＝である。

ハルツ氏は、免状の存在に驚きながら、「非常にミステリアスな人物」と大武を評する。しかし、資料室には、発行記録などといったものはないようだ。

正規入学でないにしても、言葉やブラジルに慣れながら大武が生徒らと友情を育んだことは、帰国後に友人らと交した手紙（大武家所蔵）からも見て取れる。

一年の航海を共にし、レオポルド殿下に大武を託されたであろうクストジオが一八九一年十一月に海軍大臣に就任していたのだから、〝大船に乗った〟気分でもあったろ

う。

しかし、ブラジルの時局は大きく動いていた。大武の免状が発行された六日後の四月三十日、クストジオは海軍大臣を辞任してしまうのである。

MINISTERIO DA MARINHA

海軍省が発行した「4級機関士免状」。海軍大臣だったクストジオの署名がある。

8、海軍の反乱に参加？

―都落ち、コーヒー農場に―

クストジオはデオドーロ・フオンセッカ初代大統領を引き継いだフロリアーノ・ペイショット大統領の独断的な政治手法を嫌い、九三年四月に海軍大臣を任期半ばで辞任。

同年九月六日に憲法に則った大統領選挙を主張し、リオのグアナバラ湾内の艦隊に立てこもり、反旗を翻した。いわゆる「海軍の反乱」（Ｒｅｖｏｌｔａ　ｄａ　Ａｒｍａｄａ）である。兵学校の生徒らもこれに加わった。

陸軍と海軍の反目の戦いでもあったこの反乱には、パラナ、サンタカタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールなど各州で連邦制を主張するフエデラリスタらも呼応したが、翌年三月、反乱軍の敗北により終結する。

大武も参加したといわれているがどうなのか。

海軍資料室の歴史研究家パウロ・ジアス・ヴイアナ氏は、「兵学校の生徒らと行動を共にした可能性はあるが、外国人が参加したという話は聞いたことがない」とかぶりを振る。

しかし、気骨ある父に育てられた明治人大武がクストジオに恩義を感じて、仲間との友情に従ったとしても不思議はない。

反乱軍は、グアナバラ湾沖に艦隊を集結させ、陸の政府軍と対時する形となり、膠着状態が続いた。

「ー陸上砲台の十字砲火を浴びて、だんだん不利となり、遂に陸上との連絡を絶たれ、食糧の不足が誰の目にも明らかになった。特に若い海軍兵学校生徒たちの意気消沈が甚だしかった。大武は小説にもあるまじき自分の不思議な運命を考えつつ潔く日本人らしく戦死の臍を決し、大胆にも唸ってくる砲弾を物ともせず、幻の様な夜のリオ市を眺めていた」(埋もれ行く拓人の足跡)

この状況のなか、大武は青年士官や仲間らに諭され、クストジオと顔を合わせることなく、下船することになる。

「幸いか不幸か寸前を弁ぜざる夜の闇黒は彼の乗っているボートを、何の異変もなく披止場に運んでくれた」ー。

講談調で伝える鈴木の「埋もれ行くー」によれば、再び、メンデス商会に働く大武だが、反乱軍降伏の報を聞き、リオを離れている。

「一度は船舶会社に入り、機関士になったが、グアナバラ湾の光景に接することは、徒に傷心の種を蒔くことであった」

後、サンパウロ州に移り、リベイロン・プレット市(サンパウロ北西約三百キロ)近くのシンブー駅のコーヒー園で精選工場の機械技師として働いた、とあるが、「かかる駅名はないので、恐らく彼の覚え間違いと思う」と鈴木の注釈がある。

モジアナ線最大の町であるリベイロン・プレット市から南に約百キロ。同市周辺に一九〇八年に最初の日本移民が入った。その一つであるグアタパラ耕地近くに住む郷士史

研究家、林良雄氏も、「シンブーに類似する駅は、過去も現在もない」と話す。

林氏によれば、当時モジアナ線には、四十近いファゼンダと呼ばれるコーヒー園があり、その全てに精選工場があったようだ。サンパウロ州内随一のファゼンダ密集地域であったから、その名前は他州にも聞こえていただろう。

当時、リオからサンパウロに来る手段は徒歩を除けば、鉄道では、セントラル線（Ｃｅｎｔｒａｌ　ｄｏ　Ｂｒａｓｉｌ）があった。

サンパウロでパウリスタ線に乗り換え、百キロ北にあるカンピーナスへ。さらにモジアナ線でリベイロンクプレットへ、というルートは、多くの初期移民が辿った道でもあった。

コーヒー栽培に従事した日本人の嚆矢といわれる鈴木貞次郎は、一九〇六年に水野龍とともに同沿線を視察。自らを実験台にして、チビリサ耕地（現在のクラヴイーニョス市近く）で一年働いている。

鈴木は、大武からファゼンダの体験談を聞き、その着想を得たのではないか。どの耕地にいたかは定かではないが、ファゼンダに入った最初の日本人は大武ということになる。

30年代前半の鈴木貞次郎。大武の話を聞き、コーヒー農場体験の着想を得たのだろうか。

9、日清戦争知り、急遽帰国
ー公便館に通訳官で勤務ー

大武がブラジルに滞在してからすでに四年が経過していた。都落ちし、これからの人生について二十三歳の若き青年が大いに悩んでいたことは想像に難くない。誰一人同胞のいないブラジルで祖国への想いを逞しくもさせていただろう。

そんなとき、大武は華々しい祖国の戦果を伝えるニュースに接する。一八九四年八月一日、日本は清国に宣戦を布告。九月に黄海海戦、十一月には旅順を占領する日清戦争が始まったのである。

海軍の反乱でも仲間と運命をともに出来なかった大武である。この知らせは帰国を決意させるに十分であった。

前述したように、外務省に記録がないため、ブラジルを発った時期ははっきりしていない。

ただ、九五年一月一日付けのプルデンテ・デ・モラエス大統領令

現在の海軍兵学校。大武のいた1890年代はグァナバラ湾にあるエンシャーダ島（Ilha das Enxadas）にあった。

で少尉以下を対象とした海軍の反乱に対する特赦令が出ている。

もし大武が兵学校に未練があり、これによりブラジルに留まったと仮定すれば、特赦令を知らずに九四年末に出港しているのではないか。

帰国が九五年四月の日清講和条約締結後であったことを考えれば、約半年という帆船での航海期間も納得がいく。しかし、やっとの思いで辿り着いた祖国で徴兵忌避の疑いをかけられ、取り調べを受ける羽目になる。まさに地団駄を踏む心境であったろう。

オリベイラ・サンパイオ。大武帰国後も家族の写真を送ったり、近況を報告し合うなど交友は続いた。

列伝では、「一時帰国のつもりで帰った日本で父の死に遭遇したり、マニラ（フィリピン）に出掛けたりしているうちに―」とあるが、知康の死は、さらに数年後の九九年（明治三十二年）七月十二日が確認されている。

まだスペインの統治下にあったフィリピンの方

Setembro, 2 de 1909

POST CARD.

Otake,
Mande-me noticias suas, de Takenouchi, Kondo, Kubota, Toi e de mais outros de quem me recordo com sinceras saudades. Como se tem dado com a sua vida de casado? Estou actualmente como Capitão do Porto de Santa-Catharina. Lembranças de amigo Alfredo

W. Otake Samma
Brazil no Koshikan
Akasaka
Ayochô San ban
Japan
Tokio

アルミランテ・バローゾ号以来の友人、オリベイラ・サンパイオ（後の海軍中将）からの手紙。1909年9月の消印がある。大武の結婚生活などについて聞き、サンタ・カタリーナ州の港の責任者になったことを伝えている。

は何の目的だったのかはっきりしない。

帰国途中に寄港し、何かの縁を得たのだろうか。スペイン語圏でポルトガル語の響きを探りながら、ブラジルへのサウダーデ（郷愁）を噛み締めていたのかもしれない。

帝政崩壊、海軍の反乱、日清戦争と時代の波に翻弄され続けた大武。やるせない思いに一人とらわれていたとき、大きな転機が訪れる。

九五年十一月五日、パリで日本とブラジル両国間で修好・通商・航海条約が締結されるのである。

同条約が批准を経て、発効された九七年、日本、ブラジル両国に公使館が開設、リオ・ペトロポリスに珍田拾己、東京にはカルロス・リベイロ・リスボアが初代公使として着任する。大武は通訳官として、四二年に第二次世界大戦による国交断絶により、大使館（二四年に昇格）が閉鎖されるまでその任にあった。

クストジオとも芝離宮で会っている当時外務大臣の大隈重信の推薦によるものだったというから、大隈も予期しなかった人材の〝発掘〟に苦笑いしたことだろう。

大武は、当時唯一ポルトガル語を知っていた日本人といってもいい。

東京外国語学校（九九年東京外国語大学に改称）にスペ

通訳官となって五年目の大武（後列左）。友人らと青春を謳歌していた28歳。横浜の写真館で1900年（明治33年）撮影。

イン語学科が設置されるのは、ブラジル公使館が設置された九七年。

同語学科を卒業し、笠戸丸がブラジルに着く前にサントスに入った通訳五人男（加藤順之助、嶺昌、仁平崇、大野基尚、平野運平）の言葉が全く通じなかったという話は有名だ。

同校にポルトガル語学科が設置されるのは、さらに二十年後の一九一六年（大正五年）である。

無論、ポルトガル語の辞書はなく、英葡語辞書をひくよりほかなかった。日ポ両語の読み書きが出来る唯一の人材として、笠戸丸移民に始まる移民事業の公文書作成などに携わった大武が、自身の経験を以って、ポルトガル語辞書の必要性を強く感じるようになるのも至極当然といえよう。

１０、初の葡語辞典は九州なまり？
ー青柳郁太郎との交誼ー

水野龍を始め、移民事業に携わった立場の人間からすれば、公使館で通訳官として勤務する大武の存在は、ブラジルを知る唯一無二の責重な情報源だったに違いない。

大武の終生を通じた友人だったという青柳郁太郎は、一九一〇年九月にリオに着き、サンパウロ、パラナ、サンタカタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールなどを視察。

サンパウロ州政府に土地譲渡を請願、これが受け入れられると帰国、一二年に渋沢栄一や高橋是清らと「伯剌西爾拓殖株式会社」を創立し、桂植民地、レジストロ、セッテ・バラスを創設する。

盟友青柳郁太郎。ブラジル、移民を語り合った大武生涯の友だった。青柳の死から一週間後、後を追うように大武も逝った。

移住地などの医療衛生改善のため、二四年に発足した邦人社会初の診療組織「在ブラジル日本人同仁会」の初代理事長を務めている。

開拓当時の青柳の手記には、「なお出稼ぎの夢さめず、土着自営の心構えがない」とあり、殖民の困難を嘆いている。

ブラジルに移民を根付かせるためには、ポルトガル語の習得が必須と考えたであろう青柳が大武の編纂事業に協力、激励したことは疑う余地がない。

大武が辞書編纂に関心を持ち始めるのも、こういった移民送り出しに直接関わり、青柳との交流で現地の状況なども聞いていたことが手伝ったのではないか。

一九三七年（昭和一二年）の『葡和新辞典』発行を知らせる新聞の取材に大武は、その動機をこう話している。

「―在留日本人は言葉を知らないため随分損をしてゐるので正確な辞書を作り少しでもこの損失を少くしようと編纂を思いたったのです」

移民らが突き当たるであろう言葉の壁の厚さを、大武は四年のブラジル滞在で十二分に感じていたー。

日本におけるポルトガル辞書の編纂は大武のそれが初めてとされているが、正確ではない。

日本とポルトガルの歴史は深い。一五四一年にポルトガル船が豊後（現在の大分県）に漂着、四三年の鹿児島県種子島の鉄砲伝来は、よく知られている。

四九年には、フランシスコ・ザビエルが来日、イエズス会の布教活動が始まる。一六〇五年頃に宣教師が本国に送った報告では、日本人信者は約七十万だったという。この数は、一九七七年当時のブラジル日系人人口に相当する。

その多くが宣教師や聖書を通して、ポルトガル語に親しんだと考えると、「ボタン、カステラ、カッパ」など、現在の日本語にポルトガル語を語源とした言葉が残るのも当然といえよう。

そして、布教開始から約半世紀後の一六〇三年、日本イエズス会は、『長崎版日葡辞書』、翌年には『長崎版日葡辞書補遺』を刊行する。併せて三万二千語を超えるもので、当時の九州方言などを知るうえでも貴重なものとなっている。

1603年、日本イエズス会発行の「長崎版日葡辞書」。

しかし、辞書出版後、キ

リスト教が禁止される。

一六三九年には、ポルトガル人が迫放され、船の来航も禁止される鎖国時代に入る。

歴史的に関係の深かったポルトガル語と日本の関係は、一九〇八年のブラジル移民開始と、大武の辞書編纂を待つことになるわけである。

なお、この辞書は一九八〇年、土井忠生、森田武、長南実の三編者により、岩波書店から「邦訳日葡辞典」として出版されている。安土桃山時代の日本語が発音記号付きで紹介されており、日本語学の分野でも非常に責重なものといえよう。

1918年（大正7年）に発行された「葡和辞典」の初版。多くの移民が携え、海を渡った。

１１、私財投じた畢生の大事業
ー大武知る伯人がリオにー

「漆黒の美髭今や白く満身に脈打つ血潮はこのため血圧二百十を数えるにいたったが、不退転の意気はこの肉体的苦患を克服しー」。東京日日新聞（一九三六年十一月十二日付け）は大武の健康状態にも触れ、「畢生の事業」と辞書

編纂を伝える。

『葡和辞典』（一八年）『和葡辞典』（二五年）を刊行した大武だったが、五十五歳（二七年）の誕生日に、新たな辞書の編纂を思い立つ。

二四年から二七年の移民数を見てみると、年間三千六百八十九人から九千六百二十五人にと年々急増を続け、二八年には、一万二千人を超えるピークに入る。

このような背景に加え、ポルトガル語の綴字法の度重なる改正があったこともその理由だったようだ。

私財一万円（現在の約二千万円にあたる）を投じ、十年後の三七年（昭和十二年）に見出し語六万八千語を収録した『葡和新辞典』を出版。収録十万語を超えたこの辞書は、今なお最大の語彙量を誇る日本・ポルトガル語辞書である。

「或日大使館から原稿を自宅に持ってきたその日大使館が火災に遭一日の差で危く灰になるのが助かった。天佑だと狂わんばかりに喜び泣いた」（同記事）。辞書編纂にかける執念を感じさせるエピソードである。

当時の大武を知る唯一の人物であると思われるブラジル人がリオ・デ・ジャネイロ州ニテロイ市に住んでいる。

「オタケさんね、字引作ってた。会うの毎日くらいでした」。そう記憶を辿るように日本語で話すのは、ブラジル国費留学生として三七年から約五年間、東京に住んだルイス・アントニオ・ピメンテル氏（９５）である。

安藤広重の浮世絵や松尾芭蕉の誹諧をこよなく愛し、日本の滞在記やポルトガル語の自作短歌・誹諧集などを出版、現在も地元紙の文化コラムで健筆を揮う日本文化紹介の草分けでもある。

リオ・ニテロイ在住のピメンテル氏。生前の大武を知る唯一のブラジル人。

「島の娘」（小唄勝太郎、三二年）や「別れのブルース」（淡谷のり子、三七年）を口ずさみ、「芸者遊びで日本語を覚えた」と話す。自身を「ニッパクジン（日伯人）」と呼ぶ大の親日家だ。

「ブラジルには帰りたくなかった。もう一年延長、もう一年ってね。好きな女性もいました…」と当時を振り返る。

滞在中には、詩人の堀口大学や日伯新聞社主の三浦鑿（さく）とも交流があったという。ピメンテル氏が「面白い人でした」と評する三浦から習ったという言葉は、〝ざっくばらん〟。反権力を貫いた姿勢と独特の文体「へなぶり調」で邦人社会での人気が高かった三浦らしさを感じさせるエピソードだ。

当時、ピメンテル氏を含め二人いたという留学生は、よく大使館に出入りしていた。個人的な付き合いはなかったというが、大武はピメンテル氏に単語の意味などを確認していたようだ。

１２　うわ言もポルトガル語
「伯国に忠節を尽くす」

新聞は辞書編纂先達の苦労の言葉をこうも伝える。

「何しろ教へを乞ふ先生がないので大使やブラジルの友人に問合わせたり随分骨を折りました、ベローゾ現大使をはじめ歴代大使もいろいろ面倒を見てくれました、お蔭様でやっと近く出版の運びになりました」

当時の大使だったレオン・ベローゾ氏は、辞書の推薦文で次のように書いている。

「地上どこを探しても大武氏ほどブラジルと日本を近づけるため昼夜の別なく献身的な努力を払ってきた人はいない。（中略）両国民の相互理解の基本的文献として残るであろう本辞書がその証左である」

大武は編者の緒言として、こう記している。

「幸にして本書が在伯同胞の伯語学習上の一助となりひいては日伯両国の修好通商上幾分でも寄与するならば編者の刻苦十年の努力も亦空しからずである」

大武の業績に対し、ブラジルから一九二八年（昭和三年）、青柳郁太郎、多羅間鉄輔（バウルー領事）が発起人となり、感謝状と記念品として、金時計、ダイヤ入り指輪、銀製巻煙章入、銀製灰皿を贈っている。

「十年前迄の渡伯者は恰も杖なくして彷徨する盲人の如く日常容易に葡語の邦訳をしることほとんど不可能でした

（中略）葡語辞典一度出現するに及び此難を一掃するのみならず爾来我々伯国在住者の蒙る利便は測り知るべからざるものがありますー」と感謝状にある。

大武は友人青柳の思いやりとブラジル邦人社会からの感謝の声をことのほか喜んだといわれる。

信一は「大武和三郎略歴」でその晩年の大武をこう書いている。

「その性格は激烈でアマノジャク的であったが、実は内心人をなつかしがる性質であったから、太平洋戦争の為、ブラジル本国との連絡途絶えた後、遥かにブラジルの知人や多数の移民諸氏のことを気にかけて居り、脳出血で倒れたときも出るウワ言はポルトガル語であった」

五〇年、信一により再版された「葡和新辞典」の初版が大武の最期を伝えている。

四二年、戦争による国交断絶を受け、失意のうちにあった大武は、「四四年早春（二月十六日）旧友青柳氏の逝去を聞き、愕然として消沈し旬日を経ずして追うが如く心臓麻痺により急逝した」。

信一は、「日伯文化国交増進にその一生を貫」いた父への尊敬の念からか、リオで受けたと思われる洗礼名である〝トーマス大武〟の名を用い、死去の前日に漏らした一言を書き留めている。

「自分はあくまでブラジルに忠誠を誓う」ー。

移民のため、日伯友好のために尽くしたその人生は、四

四年二月二十三日、静かに幕を閉じた。享年七十一歳。

毎日新聞に掲載（四四年三月三日付け）された大武の死亡広告＝　写真＝は、奇しくも盟友青柳郁太郎と隣合わせとなっている。ブラジル、移民への思い断ち難かった二人が一蓮托生かのように―。

44年3月3日付け毎日新聞掲載の死亡広告。

大武和三郎
略歴と展示コーナー設置の経緯

森田左京

数年前になるが、人文研の脇坂勝則顧問から、移民史料館に「大武和三郎展示コーナー」をつくり、大武さんの功績を顕彰したいという相談を受けた。脇坂さんは移民五〇年祭のときも、多くの日本移民が世話になった葡和・和葡辞典の著者、大武さんの顕彰を提案し新聞にも投稿したが、顧みられることがなかったという。

それから五〇年が過ぎて、笠戸丸百周年も近いので、この話を再燃させたく、ついては大武さんの遺族と連絡をとりたいとのことだった。

大武さんは昭和一二年（一九三七年）に「葡和新辞典」を九年にわたる編纂の苦闘を経て、さらに私財一万円を投じて出版したが、当時ブラジル移民の数は減少の一途をたどり、昭和一六年の開戦で長年の勤務先であったブラジル大使館も閉鎖され、失意のうちに昭和一九年（一九四四）二月に亡くなった。

戦後、父親の遺志を継いで長男の信一さんが、「葡和新辞典」を昭和二五年（一九五〇）に、「和葡辞典」を翌年、復刻版として出版し、再開された戦後移民にとって、親子二代にわたっての多大な貢献には感謝にたえないものがあ

る。

「大武信一」をインターネットで探し、同氏が東京大学工学部機械工学科昭和一六年の卒業であることを突き止めた。偶然だが、私の十二年先輩であり、直ちに機械科の事務所に問い合わせ、ご遺族の現住所が判明した。

移民史料館の名前で出状したところ、二〇〇四年一月に信一さんの長男和夫さんから丁重な返事が届いた。同氏は東大とハーバード大で法律を学んだ日米両国の資格を有する弁護士である。

その手紙には、大武さんの死後、信一さんが大事をとって、父親の荷物をすべて疎開したが、残念なことに疎開先が空襲で貴重な資料は総て焼失したとのことだった。

脇坂さんは二〇〇四年訪日時、和夫さんと会う機会があり、その後も連絡が続いている。

史料館が二〇〇七年六月に、プレ笠戸丸の三人の来伯者、大武和三郎、隈部三郎、藤崎三郎助の特別展示会を開いた際、大武さんの写真など展示に役立ちそうなものがあれば、送っていただきたいとお願いしたところ、和夫さん本人が、六月に来伯するとの連絡が入った。和夫さんは西林総領事と学生時代からの親友で、総領事在任中に祖父曾遊の地ブラジルを訪ねたいとのことであった。

同時に今まで見落とされていた、貴重な資料も見つかり、急遽送られてきた。おかげで展示会に花を添えることができた。

終わりに、大武和三郎さんの簡単な年表を紹介してお

く。大武さんについては、五〇年祭に際して出版された「物故先駆者列伝」の中の、桑原忠夫氏（元毎日新聞記者）の報告、また鈴木南樹氏や佐藤常蔵氏の本などにいろいろ発表されているが、インターネットなど使えない昔のことなので、正確さに欠ける点もあり、また筆者のペンが滑りすぎた個所もあったが、今回ニッケイ新聞の堀江記者によって、新たな知見に基づいた記事が書かれたことは、大きな喜びである。

（サンパウロ人文科学研究所　監事）

大武和三郎・関連年表

（？）は未確認事項

年月日	年号	年齢	関連事項
1872	明治5		東京神田駿河台で誕生、父・知康の3男
78・4月	11	6	小学校入学（浜松小学校？）
83・6月21日	16	11	浜松学校退校　東京へ移転
84・4月19日	17	12	忍岡小学校高等科第二級卒業　証（小学7年生？）
85・4月	18	13	（小学校8年生卒業？）
85・4月			（志塾塾　入学？　1年生？）
85・11月			志塾塾　講義試験　甲種褒賞
89・7月20日	22	17	「アルミランテ・バローゾ」横浜入港
89・8月4日			同船　横浜出港　大武出国
90・7月29日	23	18	同船　リオに紡港
92・1月	25	20	（大武海軍兵学校入校　機関科1年？）
93・9月6日	26	21	クストジオの主導で「海軍の反乱」始まる（大武2年？）
94・3月13日	27	22	反乱軍の降伏により「海軍の反乱」終結　クストジオはポルトガルに亡命
			大武は海軍兵学校から放校
94・8月1日			日本が清国に宣戦布告　9・17黄海海戦　11・21旅順占領　大武　日清戦争を知り、参戦のため帆船に乗りブラジル出国。
			マゼラン海峡、南太平洋、マニラを経て日本に帰国
95・1月1日	28	23	特赦令　海軍少尉以下が対象・大武も含まれる？
95・4月17日			日清講和条約調印
			大武　日清戦争終結後日本に到着、徴兵忌避の疑いを受ける
95・11月5日			日伯修好・通商・航海条約　締結（パリにて）
97・2月	30	25	日伯修好・通商・航海条約　批准を経て発効
97・8月			日伯両国相互に公使館を開設
97・9月			珍田捨己公使　着任
			Carlos Ribeiro Lisboa 公使　着任
97・9月			大武　ブラジル公使館に勤務（1942年　大使館閉鎖まで）
97・4月22日			東京外語にスペイン語科　設置
1904・2月10日	37	32	日露戦争　ロシアに宣戦布告
05・9月5日	38	33	日露講和条約　ポーツマスで調印
08・6月18日	41	36	第一回移民船　笠戸丸　サントス入港
16・	大正5	44	東京外語　ポルトガル語科　設置
18・	7	46	大武「葡和辞典」出版
23・5月1日	12	51	日本の公使館は大使館に昇格
24・	13	52	ブラジルの公使館は大使館に昇格
25・	14	53	大武「和葡辞典」出版
37・	昭和12	65	大武「葡和新辞典」出版
40・	15	68	村岡玄　日本で最初の「西和辞典」（大観堂書店）を出版
41・12月8日	16	69	太平洋戦争　勃発
42・1月29日	17	70	ブラジル　日本と国交断絶
44・2月16日	19	71	親友・青柳郁太郎　死去
44・2月23日		71	大武和三郎　死去
45・6月6日	20		ブラジル　対日宣戦布告
45・8月15日			終戦　日本降伏
50・	25		大武和三郎長男　大武信一「葡和新辞典」再刊
51・	26		大武信一「和葡辞典」再刊
58・	33		高橋正武「西和辞典」（白水社）出版

青柳郁太郎

（あおやぎ・いくたろう、一八六七～一九四四）

ブラジルの日本人植民地経営先駆者。在伯邦人衛生医療機関「同仁会」初代理事長。ラテン・アメリカ協会専務理事。

千葉県生まれ。一九〇七年（明治四〇年）子爵・大浦兼武（官僚・政治家）、長谷川芳之助（工学博士）らとブラジル殖民方法を研究。

翌年、第二次桂内閣に南米殖民の必要性を説き、意見書を提出したが不成功。大澤幸次郎（大地主）、杉浦重剛（教育家）らの賛同を得て、「東京シンジケート」（企業組合）を設立。

一九一〇年（明治四三年）、シンジケートの代表としてブラジルへ渡り、サンパウロ州全域とパラナ、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スール三州を視察。

一九一二年三月、サンパウロ州政府との間に、南西岸イグアツペ地帯の土地の無償払い下げを受けて、日本人植民地を建設する契約を締結。これは後進地帯であったサンパウロ州海岸地帯開発という重大使命を担っていた。

一九一三年、渋沢栄一、高橋是清らを創立委員として、「伯剌西爾拓殖株式会社」（一九一七年、海外興業株式会社に統合）を創立、レジストロ、セッテ・バラス、桂の三植民地を創設。

集団自作農業制度の成功は、ブラジル日本人移民を刺激し、平野植民地や上塚植民地創設の素因となる。

一九四〇年（昭和一五年）、移植民事業功労者として藍綬褒章を受ける。

（『日本ブラジル交流人名事典』から抜粋）

サンパウロ人文科学研究所

ブラジルの日本移民史、ブラジルの日系人に関する調査・研究を行なう唯一の研究機関。

1946年に発足した「土曜会」の有志を中心に、「サンパウロ人文科学研究会」が発足、同会を発展的に解消し、1965年3月に創立された。

日本・ブラジルの共同・委託研究に従事するほか、国内外からの研究者への協力も行なっている。

日本移民100周年を記念し、『人文研研究叢書』を発行している。

(http://www.cenb.org.br/)

ブラジル日本移民史料館

1978年、ブラジルへの日本移民開始70周年を記念して、サンパウロ市リベルダーデ区にある「ブラジル日本文化福祉協会」の7、8階に設けられた。97年には9階もオープンした。

展示物用品5千点、文書類2万8千点、写真1万点を所蔵、その多くが移民やその子弟により、寄贈されたもの。現在、所蔵資料のデータベース、デジタル化を進めている。

Museu Histórico da Imigração Japonesa no Brasil
Rua São Joaquim, 381 7º-9º and. - São Paulo - SP - Brasil
Tel./Fax: 55-11-3209-5465

著者略歴　堀江剛史（ほりえ・よしふみ）

1975年、広島県生まれ。02年からニッケイ新聞社記者。03年「フジモリ待望論はあるか」で日系新聞協会特別賞。(yoshihorie@hotmail.com)

資料提供　大武和夫、森田左京、横浜開港資料館、ブラジル日本移民史料館

ブラジル日本移民100周年記念

日伯友好の礎　大武和三郎　辞書編纂と数奇な生涯

発行日　2008年5月
著　者　堀江　剛史
発行者　サンパウロ人文科学研究所
Centro de Estudos Nipo-Brasileiros
Rua São Joaquim, 381 3º and. - São Paulo - SP - Brasil
Tel./Fax: 55-11-3277-8616
E-mail: centro.nipo@terra.com.br
印刷所　トッパン・プレス印刷出版有限会社
Rua Muniz de Souza, 655 - Cambuci
CEP 01534-000 - São Paulo - SP - Brasil
Tel.: (11) 3209-5522 - Fax: (11) 3209-3975

レイアウト　田中慎二